

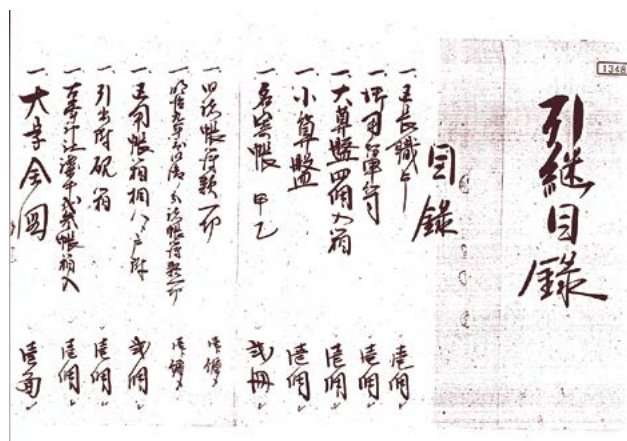


むらで継承された歴史史料

近世以前に成立した村々の多くは、近代以降「大字」や「部落」と呼ばれるようになりました。そして、この「大字」や「部落」で継承されてきた史料を、「区有文書」と呼びます。区有文書には、近世から現代までの多種多様な史料が含まれています。しかし、近世から現代までの長きにわたり、史料をどのように継承してきたのでしょうか？それを知る手がかりとなるのが、区有文書の中に残されている「引継目録」です。

引継目録は、むらの区長が交替する度に作成されます。前の区長から次の区長に、役職と共にむらの重要な記録も引き継がれるからです。ここでは、大正時代から1970年代までの引継について確認できる、千田地区(旧緒川村)に残された区有文書の引継目録から、その一端を伺ってみましょう。

千田地区の引継目録の中で最も古い「那珂郡千田村御検地水帳」という史料の作成年代は寛永18年(1641)となっております。検地といえど存知のように、税や土地に関係します。税や土地などの権利に関わるむらの記録は、特に重要なものとして残されたのです。



千田区有文書 引継目録 昭和17年(1942)



長谷川 達朗氏
近現代史部会 協力員
一橋大学大学院
社会学研究科
総合社会科学専攻
博士後期課程

このような「紙」の記録が大半を占める中、「区長職印」や「御用筆筒」、「大算盤四個箱入」などの「物」も引継目録には記されています。「御用筆筒」というのは、恐らく、むらの文書類が詰め込まれた筆筒のことで、筆筒丸ごと次の区長に引き継がれてきたのでしょうか。また、区長の仕事に必要な印鑑やそろばんなどの道具も継承されていました。

さらに、「紙」や「物」だけでなく「記憶」も継承されたことが引継目録からは伺えます。1970年代の引継目録には、「その他口述」という項目があり、その時々重要なことが口頭で引き継がれていたようです。ただし、こうした項目は、何故か1960年代以前の引継目録にはなく、引継の仕方が時代とともに変化していったと考えられます。

常陸大宮市域には、このようにして継承されてきた区有文書が多数残されています。今後は、区有文書をひも解くことで、さらに詳細にむらの歴史を明らかにしていきたいと思えます。

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)

『常陸大宮市史』の記念すべき第1冊目が刊行されます！

【「常陸大宮市史編さん事業」とは？】

平成28(2016)年度から始まった「常陸大宮市史編さん事業」では、専門の研究者たちが集い、常陸大宮市域の歴史や文化・民俗はもちろん、自然環境に至るまで、広い視野と最新の研究成果を反映した『常陸大宮市史』の刊行に取り組んでいます。

「市史」や「町史」、「村史」などのいわゆる「自治体史」と呼ばれる刊行物は、私たちが暮らしている地域の古い時代から現代までの歴史や文化、自然環境などを調査し、まとめた書物です。

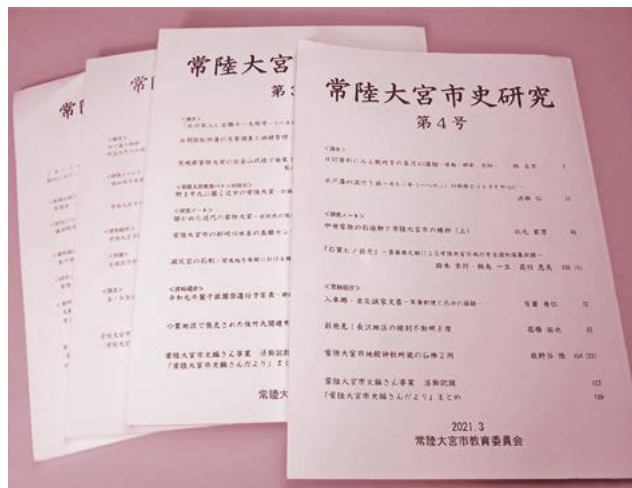
常陸大宮市が大宮町・山方町・美和村・緒川村・御前山村の5町村だった時にも、それぞれに自治体史が作られていました。しかし、その多くは昭和50年代に刊行されたものであり、一番新しい『美和村史』の刊行からも30年近くが経過しています。『常陸大宮市史』では、それらの成果を引き継ぎつつ、市や県を越えた幅広い調査によって近年発見された資料や研究の成果を反映させながら、新しい常陸大宮市の姿を記録していきます。

【『常陸大宮市史研究』とは？】

調査・研究を進めていくなかで得られた成果や、新たに発見された資料などをいち早く皆さまにお知らせするために、平成29年度から『常陸大宮市史研究』を刊行しています。第1号は完売のため、常陸大宮市のホームページから無料でご覧いただけます。今年度は第5号が刊行予定です。掲載内容や目次については、ホームページをご参照ください。



◀市ホームページはこちら



【ついに『常陸大宮市史』の第1冊目が登場します！】

第1冊目は、『常陸大宮市史 別編2 自然』。常陸大宮市域の動物や植物、地形・地質について、平成29年から令和2年の4年間にわたって調査した成果がまとめられています。自然編は「地質」(118頁)と「動植物」(592頁)の2分冊で構成されており、「地質」では常陸大宮市の地形や地質、化石、大地の変遷、岩石、そして鉱物についてまとめられています。「動植物」では、常陸大宮市の植物や哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、淡水魚類、昆虫についての調査結果が記されています。



※画像は作成中のものです。実際とは異なる場合があります。

『常陸大宮市史』刊行予定

1	別編2 自然
2	資料編2 古代・中世
3	資料編3 近世
4	資料編1 考古
5	資料編4 近世
6	別編1 民族
7	通史編1
8	資料編5 近現代
9	資料編6 近現代
10	通史編2

この自然編の販売は、4月以降を予定しております。常陸大宮市域の豊かな自然環境を知る、重要で興味深い本になっています。是非続報を楽しみにお待ちください！

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ

☎52-1111(内線344)

託された想いを未来へ…

常陸大宮地域における考古学の黎明期を首藤保之助しゅどうやすのすけの日記をたどりながら市史研究第4号に「石買ヒノ爺老」—首藤保之助による常陸大宮市域の考古遺物の採集記録—として鈴木素行、高村恵美両氏とともに報告しました。今回はその調査を通じて感じたことを記します。

およそ90年前、首藤は考古遺物を手に入れることを目的に各地を巡り、それを手に入れると創られた時代や作り手に思いを馳せつつ、タイムトリップした気分になりながら歩く、なんとも贅沢な旅をしています。この時、常陸大宮市域において採集した膨大な量の考古遺物が、日記とともに「阿武隈考古コレクション」として須賀川市立博物館に保管されているのには驚きました。日記からは首藤が単なる自己満足に浸るだけのコレクターではなく、将来、収集したものを資料として活用されることを望んでいた様子がかげがえします。今回の市史研究における調査報告は、この思いに、ちょっとだけ応えることができたのかもしれませんが。

また、須賀川市は50年前に資料の寄託をきっかけに博物館を設置し、寄託資料を「阿武隈考古コレクション」として10年ごとに公開しています。今後は資料の公開だけでなく、全国各地の収集地において歴史資料として活用できるよう研究を進めたい、とのことでした。首藤が託した「考古学的理解の啓蒙運動」「学者に対して、せめて正確



飯島 一生氏
考古部会協力員

にして豊富な資料を提供し、多少なりとも貢献したい」「資料の散逸を防ぎたい」という思いは、博物館によって実現されているのです。次回の資料公開時には、また3人で何らかの形で関われば…と考えています。

須賀川市を訪ねるたびに身近にある博物館の存在が羨ましく、博物館が存在する意義やその役割についても深く考えさせられた調査でした。

※私が博物館を退館しようとする中学生らしき生徒二人がビニール袋を下げて入館してきました。自宅近くで遺物を拾ったとのこと。品定めに来たのでしょうか。



▲石鏝(石の矢じり:伊勢畑地区だけでも500点ほどある)



▲石錘 (漁具のおもり:採取日、場所、首藤の記述がある)

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化振興グループ ☎52-1111(内線343)



江戸時代の農民は 何歳ぐらいで結婚したのか？

江戸時代の村役人の家に伝わった文書の一つに『しゅうもんじんべつあらためちょう宗門人別改帳』というものがあります。本来はタイトルにある通り、キリスト教に対する禁教政策にもとづき、教徒でない旨を最寄りの寺に確認してもらうという目的がありましたが、村民たちの名前、性別、年齢などの台帳としての役割をも担っていました。

必ずしも統一した書式があるわけではなく、記録されている情報量も時代や地域によって異なっていましたし、内容の正確さにも疑問がある場合もあります。こうした点をふまえつつも、そこから江戸時代の農村の一面を垣間見ることができます。

一例として、平均結婚年齢をあげてみましょう。分析対象は延宝9年(1681)の下檜沢村です。

この村の「宗門人別改帳」には結婚年に関する情報があり、記録された年齢から結婚した年齢を割り出すことができます。

それによると男性は23.1歳、女性は16.9歳となります。もっともこれは当主または長男(長女)の場合で、例は少ないものの、弟が同居して結婚する場合は男性28.4歳、女性23.1歳と高くなります。

これを同じ時期の、県内他地域の事例と比べて



茨城県立歴史館
史料学芸部歴史資料課
特任研究員
永井 博
近世史部会 専門調査員

みましょう。

元禄10年(1697)の大竹村(現鉾田市内)では男性27.1歳、女性21.4歳。

寛文10年(1670)の坂田新田村(現土浦市内)では、男性26.1歳、女性19.3歳。

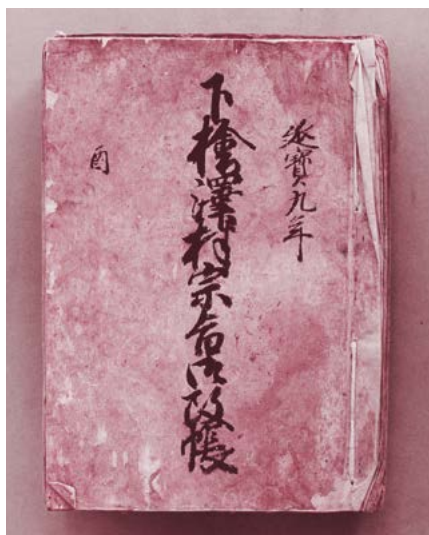
元禄8年(1695)の上青柳村(現石岡市内)では、男性17.2歳、女性14.8歳となっています。

地域によって、かなりの差があることがわかります。その理由については、慣習的なものなのかは不明ですが、こうした点からも常陸大宮市域の地域性を解明することができるでしょう。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化振興グループ ☎52-1111(内線343)



▲下檜沢村宗旨改帳(延宝9年)



昭和30年代の諸沢の新生活運動

「新生活運動」と言っても、ピンとこない人も多いかもしれません。地域によって盛んなところとそうでないところがあり、また取り組まれた時期も異なっていたりするので、なかなかイメージが一致しない面もあるようです。

『デジタル大辞林』で「新生活運動」を引いてみると、「虚礼などを廃止して、生活を合理化、近代化しようとする社会運動」と出てきます。冠婚葬祭を簡素化し、かかる費用をなるべく抑えるようにする運動はその一例ですが、それ以外に地域の衛生環境の整備や学習活動、道路や水道などのインフラの整備も含む場合があります。近年の歴史研究では、特に昭和30年代の運動に関心が寄せられており、全国各地の事例が少しずつ明らかになってきています。

常陸大宮市域では、昭和30(1955)年に茨城県新生活運動推進協議会が設立されて以降、特に活動が盛んになりました。とりわけ質の高い運動を行い、全国的にも注目されていたのは、山方町の諸



茨城大学人文社会科学部
准教授
佐々木 啓
近現代史部会 部会長

沢地区でした。諸沢では、住民同士の丁寧な話し合いを重ね、道路の改修や電力の導入、簡易水道の整備など、生活向上のための取り組みを進めるとともに、社会学級や婦人学級、老人クラブに若夫婦の集いの組織化など、住民相互のコミュニケーションと学びの場を増やす試みをおこないました。これらの活動が評価され、新生活運動協会の昭和36年度新生活運動優良地区の一つに選ばれ、副賞として郵政大臣賞を授与されています。【画像】

昭和30年代は、高度経済成長の前半にあたり、農村で暮らす人々の生活も大きな曲がり角を迎えていた時代でした。過疎化は進んでいきますし、農家経営の先行きも明るいとはいいがたい難しい時代であったと思います。そうしたなかで、住民相互の「話し合い」を基礎にして、新たな文化や技術を学び、生活上の課題に向き合っていこうという真剣な取り組みが、諸沢をはじめ常陸大宮市域の各所でおこなわれました。新生活運動の評価は様々ですが、そこから学ぶべきものは決して少なくないと思います。

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化振興グループ ☎52-1111(内線343)



▲昭和 37 (1962) 年の山方町報